特別寄稿

『自然栽培による農業改革は地域再生への重要な鍵』

株式会社木村興農社社長室長・秘書
株式会社ネイチャーズ代表取締役社長　伊達　弘恭（だて・ひろやす）

略歴：1963年、札幌市生まれ。北海道東海大学芸術工学部卒業後、札幌を本社とする東京以北最大手電子計算センターに就職。1999年3月に同社を退社し、同年、基礎化粧品製造メーカーを設立し代表取締役に就任するが2年半で退任。その後、中堅IT企業の代表取締役、会社役員、コンサルティング業を経て、2009年5月に木村秋則氏が経営する木村興農社を株式会社として法人登記させたのを機会に木村氏の秘書業務に従事する。その翌月、木村氏からの指示により自然栽培の普及・啓蒙における実行部隊として㈱ネイチャーズを設立すると同時に主宰(代表取締役)を努め、木村秋則氏の秘書業務と平行して業務を推進し、現在に至る。

現在、日本は厳しい環境に置かれ、世の中も悲観的なニュースばかりを取り上げ、地方の成功事例や明るい未来や動きを取り上げようとしない。これでは消費者のマインドも萎縮し続け、国内の消費など盛り上がらない。

ところが、今、そんな中で大きな山が動こうとしている。現代農業は、19世紀に農薬が登場して以来、農薬と肥料は農業生産者にとって必要不可欠なアイテムとなって100年以上も続いてきた。その環境に青森県弘前市の一人の農業生産者に過ぎない木村秋則氏（本部注：無農薬・無肥料による“奇跡のリンゴ”の栽培に成功）が、たった一人で一石を投じた。そして、その投じた一石の波紋は日を追うごとに大きなうねりとなってきている。その波紋とうねりの中で私も㈱ネイチャーズというフィルターを通じて、本来の農業の在り方についてフォーカスし、農業の改革に向けて活動している。

昨年一年間、私は木村氏の秘書として常に氏の講演に帯同し、寝食を共にしながら日本全国を駈けずり回った。そこで目にしてきたものは、木村氏の言葉に農業生産者が立ち上がり、消費者が立ち上がり、企業・団体が立ち上がって新たな地域づくりをしようとする情熱に満ちた姿であった。

たった一人の言葉によって、暗闇でさまよっていた人達が、明るい日差しに向かって勇気を出して歩こうとしている。その光景は行く先々で出現し、各地域が自然栽培で変わろうとする姿、日本の農業が、いや世界の農業が変わろうとしている一瞬、一場面を私は目の当たりにしてきた。暗いニュースしか流れない時代において、この機運を逃してはならないし、さらに高めなければいけない。こうした使命感を持って私は現在、農業改革の最前線で動いている。

私は、木村氏の秘書としての立場の他に、㈱ネイチャーズの主宰としても活動している。㈱ネイチャーズは、自然栽培の普及・啓蒙と自然栽培を実践している農業生産者や自然栽培への転換を目指している農業生産者をサポートする役割を持って生まれた会社であり、既存の流通機関が扱ってくれない自然栽培による農産物の流通を促進し農業生産者を支援するとともに、農業生産者と消費者との目線を合わせるコミュニティを形成することにより消費者が農業生産者を支援・育成できる環境を整え、両者のより良い関係を構築することを目指している。

自然栽培の普及・拡大を通じて食料自給率の向上を図ることができるならば、安心・安全な農産物を食することによる病気の減少、農薬・肥料を原因とする地球汚染の防止、農業のリ・エンジニアリングによる活性化が可能になると考えている。そして農業が活性化すれば、当然、地域も活気を取り戻し過疎化も防げると考えている。また農業従事者が適正な収益を確保することが出来るようになれば、各々の市町村が自立できる環境と街づくりを構築することができ、シャッター商店街も無くなるというシナジーを生むこともできると信じている。何よりも我々の世代は、正しい環境を次の世代に引き継がなければいけないという使命感を持って取り組んでいる。

今目の当たりにしている自然栽培を通じた農業改革の動きは、21世紀に再びあらわれた新たな人間復興・ルネサンス運動の到来と言っていいかもしれない。私は北海道人であり、北海道を愛している。したがって最終的には、この農業改革事業を通じて北海道の明るい未来と豊かな経済環境を構築したいと願っている。このため私は、今後も確固たるビジョンと情熱を持って木村秋則氏と共に、この自然栽培を農業のデファクトスタンダードとして確立させるとともに、北海道を『自然栽培の聖地』とできるよう努めていきたい。

仁木町・サクランボ畑での農業実習に参加した人々と木村秋則氏（前列中央）